札幌医科大学　医療人育成センター紀要　第２号　５～６（2011）　　各部門および医学部からの報告

学生の意見を取り入れた双方向性のFDワークショップ

相馬　仁[1)]、佐藤 利夫[1)]、苗代 康可[1)]、上野　淳[2)]
[1)] 札幌医科大学医療人育成センター教育開発研究部門
[2)] 札幌医科大学事務局学務課教務グループ

FD workshop taking students' point of view

Hitoshi Sohma[1)], Toshio J. Sato[1)], Yasuyoshi Naishiro[1)] and Atsushi Ueno[2)]
[1)] Department of Educational Development, Center for Medical Education, Sapporo Medical University
[2)] School Affair Section, Secretariat, Sapporo Medical University

今年度のFDワークショップでは、1学年の教育に対する学生の要望や意見を基に基礎・臨床の専門科目の教員を含めて大学全体で教養教育について討論し、考える機会を持った。双方向性のワークショップが初めて行われた。1学年を主に担当する教員と専門科目の教員のみならず、ワークショップに参加した学生からの意見も出され、活発な意見交換の場となった。教養教育についてあらためて考える有意義な機会であった。

1　はじめに

全学的に統一されたFD委員会が発足して2年目を迎えた。毎年、ワークショップを1回、複数回のFD教育セミナー、1回の新任教員研修を実施することとしている。

FDワークショップ実施の目的は、参加者が教育の基盤となる原理・原則を知り、教育への関心、ならびに教育能力を高めることが狙いである。教員が高い教育能力を身につけることにより、効果的によりよい医学・保健医療学教育が実現し、ひいては医学・医療の発展につながることが期待されることは言うまでもない。

昨年度のワークショップでは、医学部におけるCBT問題作成とブラッシュアップの方法に関するテーマで、外部講師を招いて実施した。本年度は、これまで行われてきた方法を一変させ、学生の意見を取り入れる双方向性のワークショップを計画した。今回のワークショップでは、「授業評価について」をテーマとして取り上げた。

これまでのFDワークショップで、学生の意見を積極的に取り入れるなど、学生の視点を入れるという経験はなかった。本学では学生による授業企画評価が取り入れられてから10年近くになる。医学部ではアドバイザー制の導入により、学生から教員へいろいろな声が直接聞かれるようになってきた。また、保健医療学部でも、学生による授業評価で、学生からの自由意見を収集しており、学生の視点で教育を考え直すことが大切であるとの意見が、FD委員会のなかでも指摘され、今回のワークショップの実施につながった。

1回のワークショップですべての学年を対象にすることは時間的にも困難であることから、今回は1学年の教育に焦点を当てることにした。

学生から集めた教育（講義・実習・演習）に関する感想や意見を基にFD参加教員の間で討論し、教養教育、初年次教育の在り方について、大学全体で意見交換した。本FDワークショップには、1学年を主に担当する教員のみならず、両学部様々な領域の専門科目担当の教員の参加があったので、多角的に教養教育を考えることのできる有意義なものになった。

2　内　　容

今回のワークショップは、ステップ1、2の2段階に分けた。ステップ1ではFD委員会委員が中心となり、前もって学生有志の参加を求め、4グループ（語学系、人文系、自然科学系1（生物系）、自然科学系2（物理化学系））に分かれて、それぞれ学生と担当教員の間で懇談し学生の意見等を中心に教員がその内容をまとめる機会とした。その結果をステップ2では、各グループの担当教員から報告を受け、全体で討論す

ることとした。学生と教員が直接面と向かって意見を交わすよりも、教員人数を絞ってステップ1である程度親しみやすい環境を整えることを考え、ざっくばらんな学生の意見を引き出そうという狙いがあった。また、ステップ1を担当した教員が、討論内容の概要をパワーポイントにまとめ、ステップ2でハンドアウトとしても配付できたことで、ステップ1で話し合われた内容を効率よくステップ2に参加した教員に伝えることができたものと思われる。

以下、概要を示す。なおこのワークショップの詳細は、平成22年度札幌医科大学FD活動報告書を参照いただけると幸いである。

ステップ1：（平成22年11月下旬実施）

内容：1学年の教育に焦点を当て、全体を4グループ（語学系、人文系、自然科学系1（生物系）、自然科学系2（物理化学系））でそれぞれ学生と担当教員の間で懇談を行った。

＜進め方＞

1学年の各グループで各領域の授業（実習を含む）を受けた（受けている）内容等に関する次のことについて、学生から自由意見等を収集した。

- 学生の率直な感想。
- どういう改善を期待したいか（具体的に）。
- 1学年で受けた教育は、大学に入ったときに抱いていた教育への期待に応えるものであったか。
- 活発な意見が出ないときには、参考資料として①アドバイザーミーティングで報告された学生からの授業に関する要望等のまとめ、②平成22年度シラバス、③平成21年度授業評価（該当分）を用い、教員から積極的に学生意見を引き出した。
- 但し、学生が1学年で講義（実習）を受けた（受けている）教員を個人攻撃するようなことの無いよう、教員は注意を払った。

ステップ2：（平成22年12月7日実施）

ステップ2では、学内教員に参加を呼びかけ、ステップ1で各グループを担当した教員から報告が行われ、その内容を基に総合討論が行われた。数名の学生はオブザーバーとして参加し、意見等を発言する機会が与えられた。

ステップ1で参加した学生数は、各グループ10名以下と少ないため、学生全体の意見とは言えないかもしれない。むしろ、関心が高く志も高い学生の意見であった可能性が指摘されたが、学生の視点に立って教育を考えようという機会であったことは、意義が大きいと考えている。また、参加した学生はいずれも医学部所属であった。以下、医学部の教育に特化して述べる。

今回話題にした主に1学年に力点が置かれる教養教育は、学生にとって高校の続きという印象があり、医学専門教育との関係がよくわからない、極論すると興味がもてない科目があると思われるが、どういう目的で教養教育を受けなければならないのかという点を明確にすることが重要ということが話された。また、学生からの意見には、教養教育で医学に直結するものを求めているのではない、すなわち医療者として生きていくための教養という視点で、人生の広がりがもてる教養教育を受けたいという発言もあった。

初年次の教養教育・一般教育を担当する教員はそれぞれ深い考えを持ち、それを基に教育を担当していると思われるが、6年間の医学部教育の中でかなりの知識量を詰め込まれるという現実がある。学生はCBTやOSCEを通って、診療参加型臨床実習（クリニカルクラークシップ）に入った後には、卒業試験と国家試験が待っている。効果的に毎日を過ごしたいというのが現実ではないかと思われる。そういった状況の中で1年生の時にやらなければならないことは何か、我々教員は真剣に考えていきたいものである。

一方、臨床実習を担当する教員から態度教育への要望が聞かれている。そのことを見据えた1学年からの教育も考える必要があるかもしれない。

3　結　　論

今回のFDワークショップは、教養教育とは何かをあらためて本学教員全体で考える機会になった。臨床・基礎専門教員の意見を聞くこともでき、教員間の情報交換の場となったといえる。今回は、ステップ1で保健医療学部の学生の参加がなかったため、医学部に特化した形になったが、保健医療学部の学生にも意見を聞く機会を作りたい。

今後もこのようなワークショップを開催したいと考えている。

4　謝　　辞

学務課アシスタントスタッフの塚原翠さん、臨時主事の志村正恵さん、羽毛麻紀子さんには本ワークショップの実施から実施後のまとめに至るまですべての期間、大変お世話になった。ここに感謝申し上げる。